

---

# インクルーシブ保育に関する研究動向

バリアフリー教育開発研究センター

2018年度特任研究員

高橋 沙希

---

## はじめに

本報告は、インクルーシブ保育に関する近年の研究動向をまとめることを通して、インクルーシブ保育の課題を提示することを目的としている。

近年、保育・教育現場では、障害・国籍・人種・性別等に関わらず、共に生きる実践が模索されている。この流れは、日本だけではなく、世界的にも同様であり、インテグレーション（統合）からインクルージョン（包摂）への変革として知られている。中でも、「障害」に関わる流れとして、1981年の国連の国際障害者年を契機に、1982年の国連総会における障害者に関する世界行動計画、1994年のサラマンカ宣言、2006年の国連総会における障害者権利条約の採択等により、「障害児の教育はできる限り一般教育制度の中で行われるべきである」ということや「特別な教育的ニーズを有する人々は、そのニーズに合った教育を行えるような子ども中心の普通学校にアクセスしなければならない」ということが提起されてきた（曾和、2003）。

以上の流れを受けて、日本においても2011年の障害者基本法の改正をはじめとして、2014年に障害者権利条約が批准され、2016年に障害者差別解消法が施行された。障害者差別解消法の施行によって、事業者による合理的配慮の提供が義務化され、インクルージョンへ向かう社会変革への準備が整っている。しかしながら、保育・教育現場では、合理的配慮が提供できないことを理由に入園・入学を拒否されたり、分離を強いられたりする事態が後を絶たず、インクルーシブ保育・教育が実現されているとは言い難い。

ただし、保育学・教育学における研究では、インクルーシブな実践に関する知見や検討が少数ながらも積み重ねられている。例えば、CiNii（NII学術情報ナビゲータ）で「インクルーシブ保育」でタイトル検索してみると、56件の論文等が登録されている（2020年1月27日にアクセス済

み)。そこで、本報告では、「インクルーシブ保育」をタイトルに冠する 56 件の論文の掲載状況を調べ、大学における紀要論文を除いた学会誌やそれに準ずるジャーナルで何が議論され、検討されているのかを報告する。さらに、それらの内容を通して、今後のインクルーシブ保育の課題を提示してみたい。

### (1) 「インクルーシブ保育」を冠する論文の掲載状況

まず、「インクルーシブ保育」を冠する論文の掲載状況を確認しておきたい。2020年1月27日時点において、CiNiiに登録されている限りでは、「インクルーシブ保育」を冠する論文が56件であった。そのうち、学会発表の論文集、講演記録、エッセイ、図書案内、重複したタイトル等を除くと、学術論文は、51件だった。それらの学術論文を、発表された年で分けしてみると、次のようになった。すなわち、2006年に1件、2010年・2012年・2013年に各2件、2014年に4件、2015年に3件、2016年に6件、2017年に10件、2018年に14件、2019年に7件であった。インクルーシブ保育に関する研究は、2010年代より徐々に積み重ねられ、近年の保育研究において中心的な課題の一つであることが推察される。

### (2) 「インクルーシブ保育」に関する研究内容

続いて、「インクルーシブ保育」をタイトルに冠した論文のうち、学会や協会、研究所・研究センター（大学附属は除く）が発行している学術誌に掲載されている論文の内容を確認してみよう。まず、CiNiiにおける検索で「インクルーシブ保育」をタイトルに冠する論文のうち、該当する論文は、以下の11件であった。

- ① 石井正子「インクルーシブ保育に関する保育者の認識」日本乳幼児教育学会『乳幼児教育学研究』9号、2010年
- ② 矢野正「共生社会の形成に向けたインクルーシブ保育・教育制度構築に関する一考察」社会福祉科学研究所『社会福祉科学研究』2号、2013年
- ③ 矢野正「インクルーシブ保育・教育システムの構築に向けた今後の課題:自我発達観点からみた「こだわり行動」の意味」地域福祉総合研究センター『地域福祉サイエンス』1号、2014年
- ④ 浜谷直人「インクルーシブ保育と子どもの参加を支援する巡回相

- 談」全国障害者問題研究会『障害者問題研究』42巻3号、2014年
- ⑤ 河合高鋭・小山望「幼稚園におけるインクルーシブ保育への一考察：保育者の意識を対象とした分析をてがかりに」日本人間関係学会機関誌編集委員会『人間関係学研究』20巻1号、2015年
  - ⑥ 柘千晶・橋本創一・秋山千枝子「インクルーシブ保育における特別な支援を要する子どもの活動参加に関する調査報告：参加可能な遊びに着目して」日本小児保健協会『小児保健研究』75巻5号、2016年
  - ⑦ 堀智晴「インクルーシブ保育の意義とその実践上の課題」日本保育学会『保育学研究』55巻1号、2017年
  - ⑧ 袴田優子・飯村敦子・小林保子ほか「要配慮児の発達を巡る保育者のスキル形成と専門性の向上に関する研究：インクルーシブ保育の実践をめざして」日本保育協会保育科学研究所『保育科学研究』8号、2017年
  - ⑨ 堀口寿広・秋山千枝子・橋本創一「リカバリーしやすい地域づくりとは：インクルーシブ保育の試みから」国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所『精神保健研究』31巻64号、2018年
  - ⑩ 袴田優子・飯村敦子・小林保子ほか「インクルーシブ保育の実践における保育者の専門性の向上に関する研究：アセスメントの活用による保育実践」日本保育協会保育科学研究所『保育科学研究』9号、2018年
  - ⑪ 篠原久枝「児童学の研究と実践の接面 フィンランド インクルーシブ保育における給食の時間についての一考察」日本家政学会児童学部会『児童学研究』43号、2018年

以上の論文をまとめてみると、おおよそ次の三つに分けられる。すなわち、第一にインクルーシブ保育を実践する上での保育者の専門性に焦点を当てたもの、第二にインクルーシブ保育の制度的考察を行ったもの、第三にインクルーシブ保育実践に関わるものである。以下では、それぞれの研究で明らかにされたことを中心に、内容を確認してみよう。

第一のインクルーシブ保育を実践する上での保育者の専門性に焦点を当てた研究は、①、⑤、⑧、⑩である。例えば、①では、質問紙調査の結果、保育者らがインクルーシブ保育自体には肯定的な捉え方をしているにもかかわらず、実際に障害のある幼児を含んだ学級経営をどのようにして

いくつかという具体的な場面については、不安やとまどいを感じている保育者が少なくないということが明らかにされている。⑤では、保育者に対するインタビュー調査の結果、インクルーシブ保育の実践は、保育者の意識が重要であること、とりわけ、管理職がインクルーシブ保育の理念を持っているかということが大きく関わっていることを明らかにした。⑧は、質問紙調査の結果、今後、インクルーシブ保育を実践する上で必要な保育者のスキルは、保育者が要配慮児の状況を把握し、支援計画を作成する力やすべての子どもが楽しく活動できるプログラムを開発、実践する力であることが明らかにされている。また、そのために効果的な研修の必要性も主張されている。この研究に続く⑩では、質問紙調査とインタビュー調査の結果、保育者自身がアセスメントを実施し、主体的に保育実践をしていくという具体的なインクルーシブ保育の方法が提起されている。

続いて、インクルーシブ保育の制度的考察を行った研究である②、③、④、⑦について確認してみよう。例えば、②は、特別支援教育が進行している中でも、インクルーシブな実践に対する萌芽的事例があることを紹介し、インクルージョンへ向かう方策を提起している。この研究に続く③では、特別支援教育とインクルージョンの意義をそれぞれ紹介し、その根源的な違いを示している。矢野は、サラマンカ宣言や障害者権利条約で示されている普通学校へのアクセスを保障する考え方が特別支援教育には反映されていないことを批判している。④は、インクルーシブ保育と統合保育の違いを参照した上で、実践からインクルーシブ保育を検討し、巡回相談や巡回相談員の専門性について考察している。最後に、⑦の研究では、インクルーシブ保育の意義が以下のようにまとめられている。すなわち、第一に子どもを保育の主体としてみること、第二に子どものニーズを尊重すること、第三に多様性を尊重すること、第四にインクルージョンにつながる社会環境を創り出すことである。

最後に、インクルーシブ保育実践に関わる研究として、⑥、⑨、⑪を取り上げてみよう。まず、⑥は、質問紙調査の結果、支援が必要な児童に対する介助が必要な場面は自由遊びであることが推察され、特に参加が難しい遊びについては、子どもの特性に応じた保育者の関わりが必要であるということが明らかにされた。⑨の研究では、医療的ケア児の保育として、並行保育（地域の小児科がバックアップし、ケアをできる医療職が保育所・幼稚園の登園に付き添うという方法）を行った結果を紹介している。⑪の研究では、フィンランドにおける就学前教育の実践として、特に給食

の時間に焦点を当てて、その取り組みを紹介している。保育者が絵カード等を工夫して使用しながら、子ども同士のコミュニケーションを支えている様子が描かれている。

## おわりに

ここまで、インクルーシブ保育をタイトルに冠した論文の内容を確認してきたが、最後に、インクルーシブ保育に関する課題をまとめてみたい。近年のインクルーシブ保育に関する研究動向からみえてくる課題は以下の三点である。

第一に、インクルーシブ保育とは何かということや、なぜ、インクルーシブ保育をする必要があるのかというような、いわば根源的な問いがほとんど検討されていないことである。インクルーシブ保育は、1970年代より、とりわけ関西圏を中心に行われてきた統合保育とは異なる営みであるといわれている。本稿でも取り上げた浜谷（2014）が示しているように、統合保育とは、空間的な意味で場を共にする方法であると同時に、すでにある健全児集団を前提とした方法であった。すなわち、統合保育では、障害の有無のように、分かれていたものを文字通り、「統合」することが目的なのである。しかしながら、インクルーシブ保育は、一人ひとりの違い、つまり多様な個人がいることを前提とし、すべての子どもにとって充実した保育を提供することが目的である。以上のような差異があるにも関わらず、統合教育とインクルーシブ保育は、同様のものであると捉えられているのではないだろうか。また、インクルーシブ教育において変革が必要なのは、普通学校であるといわれているように、インクルーシブ保育は、従来の保育を問い直す契機を含む営みである。日本では、障害児保育・教育の場でインクルージョンが叫ばれているが、そもそも、インクルーシブ保育は、障害だけでなく、人種・国籍・性別等、人々をすべての属性から開放し、個としての尊重を前提としている。そのような意味においても、「障害児」のみにフォーカスしてインクルーシブ保育を検討することの危うさも指摘しておきたい。

第二に、本報告で取り上げた袴田・飯村ら（2018）の研究や浜谷（2014）の研究で示されているように、インクルーシブ保育におけるアセスメントは、近年の子ども理解の一つの手法として考えられている。ただし、浜谷（2014）が示しているように、科学的なアセスメントが強調され、それに対する信頼性や妥当性が問われると、客観的な基準で測定しや

すい子どもばかりに目が向いてしまうことになりかねない。つまり、「いかにアセスメントするか以上に、なにがアセスメントの対象なのかについて柔軟に判断する、そういう視野の広さが求められる」のである（浜谷、2014）。アセスメントをインクルーシブ保育に効果的に利用するためには、固定した見方で子どもを見ようとしない保育者としての心構えを持たなければならないだろう。

第三に、多くの論文でインクルーシブな実践方法の蓄積が求められているが、はたしてインクルーシブ保育実践として定式化できるものなのかということである。確かに、インクルーシブ保育を支持する保育者は多いだろうし、そのために具体的な方法を知りたいと思うのは当然のことなのかもしれない。しかしながら、すでに指摘してきたように、インクルーシブ保育は、多様な個人が前提となっているからこそ、定式化された方法は通用しないと考えるのが妥当ではないだろうか。ただし、本報告で取り上げたいいくつかの論文の中で示されているように、インクルーシブ保育を実現する際のヒントは、すでに紹介されている。例えば、インクルーシブ保育を困難で難しいものと捉えすぎないことや、子どもを変えるのではなく周囲が変わるということである。どのようにしたら目の前にいるすべての子どもが安心して過ごせるのか、そのために周囲はどのような支援が必要なのかということ、子どもに関わるすべての大人が考えることがインクルーシブ保育の第一歩なのだろう。

### 【引用・参考文献】

石井正子「インクルーシブ保育に関する保育者の認識」日本乳幼児教育学会『乳幼児教育学研究』9号、2010年

河合高鋭・小山望「幼稚園におけるインクルーシブ保育への一考察：保育者の意識を対象とした分析をてがかりに」日本人間関係学会機関誌編集委員会『人間関係学研究』20巻1号、2015年

篠原久枝「児童学の研究と実践の接面 フィンランド インクルーシブ保育における給食の時間についての一考察」日本家政学会児童学部会『児童学研究』43号、2018年

曾和信一・堀正嗣・山下栄一・堀智晴『「障害児」保育の現在—共生保育をもとめて—』柘植書房、1983年

曾和信一『増補改訂 障害児共生保育論—反差別から共生の方へ—』明石書店、2004年

袴田優子・飯村敦子・小林保子ほか「要配慮児の発達を巡る保育者のスキル形成と専門性の向上に関する研究：インクルーシブ保育の実践をめざして」日本保育協会保育科学研究所『保育科学研究』8号、2017年

袴田優子・飯村敦子・小林保子ほか「インクルーシブ保育の実践における保育者の専門性の向上に関する研究：アセスメントの活用による保育実践」日本保育協会保育科学研究所『保育科学研究』9号、2018年

浜谷直人「インクルーシブ保育と子どもの参加を支援する巡回相談」全国障害者問題研究会『障害者問題研究』42巻3号、2014年

堀智晴「インクルーシブ保育の意義とその実践上の課題」日本保育学会『保育学研究』55巻1号、2017年

堀智晴・橋本好市編著『障害児保育の理論と実践—インクルーシブ保育の実現に向けて—』ミネルヴァ書房、2010年

堀口寿広・秋山千枝子・橋本創一「リカバリーしやすい地域づくりとは：インクルーシブ保育の試みから」国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所『精神保健研究』31巻64号、2018年

柘千晶・橋本創一・秋山千枝子「インクルーシブ保育における特別な支援を要する子どもの活動参加に関する調査報告：参加可能な遊びに着目して」日本小児保健協会『小児保健研究』75巻5号、2016年

矢野正「共生社会の形成に向けたインクルーシブ保育・教育制度構築に関する一考察」社会福祉科学研究所『社会福祉科学研究』2号、2013年

矢野正「インクルーシブ保育・教育システムの構築に向けた今後の課題：自我発達観点からみた「こだわり行動」の意味」地域福祉総合研究センター『地域福祉サイエンス』1号、2014年